

# 史遊会通信

NO. 209  
平成24年5月14日行  
事務局  
03-3712  
0651  
下山田方

例会のお知らせ  
◎ 5月例会  
日時 平成24年5月23日(水)  
午後6時～8時

四月の講演要旨  
キリストン大名

有馬一族

鍋屋次郎

有馬家は藤原純友末裔説があり、本質的にはそれと同じであるが藤原純友の子孫藤原經澄が常陸の国から建保年間（一二二三～一二一九）に、肥前口之津に上陸したとの説があり、越前丸岡有馬系譜では藤原純友末裔説をとっている。

有馬一族がキリストンと本格的に出会ったのは永禄六年（一五六三）大村純忠が宣教師コスメ・デ・トルレスから洗礼を受けたことから始まる。これが最初のキリストン大名である。

大村純忠は肥前南部を支配していた有馬晴純の二男で大村家に養子にきていた。大村純忠がキリストンになつた動機は、当

時ボルトガルの貿易船が平戸に入っていたのを、自領の横瀬浦に誘致することにより、交易利益を得ることがねらいであった。

当時のボルトガルは、カトリック教会の宣教を支えるイエズス会の東洋宣教（当時の東洋宣教拠点はマカオ）活動と共に交易船を行っていた。イエズス会の日本宣教は、天文十七年（一五四八）のザビエルの来日に始まり、その後、京では信長の、豊後では大友家の布教許可を得て日本国内での布教も行われていた。

そのような状況の中で、大村純忠の求める交易利益と、宣教師の肥前での宣教活動許可との利害が一致することから、横瀬浦に宣教

自由執筆 小田紘一郎・中込勝則  
千坂精一の諸氏

締切 5月末日

◎ 6月例会

日時 平成24年6月27日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

講演 平山善之氏

テーマ 多賀城碑「蝦夷國界」は  
どこか

自由執筆 隆恵・柴田弘武・瀧澤中  
の諸氏

締切 6月末日

師の居住を許可し、港を「御助の聖母の港」と命名し、交易船を迎えた。当時の主な輸入品は絹糸・絹織物・水晶の花瓶・唐墨などであった。

(一五六三)に重臣二十五名と共に、日本でのイエズス会宣教長であったコスマ・デ・トルレスから洗礼を受けた。

それを伝え聞いた実兄の有馬義貞は、自領の口之津港に交易船を迎えると画策し、宣教師ルイス・デ・アルメイダを招き、口之津での宣教を許可し教会も建てた。

ところが間もなく横瀬浦で反キリストン暴動が起こり、横瀬浦港は焼打ちに会い交易船の入港はできなくなつた。この騒動の影響が口之津での布教許可に影響を与えた。建てたばかりの教会が焼き討ちされた。

永禄七年(一五六四)義貞の父晴純は再び宣教師を招き、今回はコスマ・デ・トルレスとルイス・デ・アルメイダの二人が訪れ、有馬領内でキリストン宣教は静かに進められた。

天正四年(一五七六)四月十五日、この日はキリストの復活を記念する日で、義貞はカナル神父から口之津教会で洗礼(洗礼名ドン・アンドレス)を受け、その十日後には居

城日野江城において、彼の妻(洗礼名マリナ)と末子(洗礼名サンチョ)が洗礼を受けた。しかし、義貞は洗礼を受けた年の十二月病未受洗)と僧侶たちが、神父達が義貞に近づくことを許さなかつた。

義貞の死後、晴信はキリストンを圧迫し、宣教師を追放した。

ところが肥前の北を接する童造寺隆信の攻勢に危険を感じ、晴信はポルトガル人と宣教師の力を借りるため神父達に近づいた。丁度そこころ、天正七年(一五七九)七月、ヴァリニャーノ神父の乗つた船が口之津港に入港し、晴信の許可の下にこの地方で活発な宣教が行われ、晴信は天正八年(一五八〇)二月、日野江城内で洗礼(洗礼名プロクシオ・ジョアン)を受けた。

同年、晴信の居城日野江城近くにセミナリヨ(神父養成の神学校)と教会が建てられ、有馬の全領内への宣教拠点となつた。同年、兄義純の未亡人マリアと娘ルチアが洗礼を受け、天正十年(一五八二)晴信はルチアと結婚した。

天正十二年(一五八四)、童造寺隆信が戦死し、晴信は童造寺隆信の圧迫から解放され、宣教師も多くなつたため、浦上領土をイエズス会に寄進した(キリストン信仰における長崎・浦上の一體化の実現)。

天正十五年(一五八七)、秀吉による九州平定(島津攻め)が終わって、同年七月二十五日、秀吉によるキリスト教禁教令が発せられた。この時高山右近は「キリストン信仰は捨てられません。城も領土もお返します」と言つた。高山右近の持つ価値観に秀吉は驚愕した。この秀吉の禁教令は徹底さを欠いたため、晴信は自領内に宣教師を匿い、土地を与え、ヴァリニャーノによる宣教活動を支援した。

天正十九年(一五九一)九月の秀吉の命による朝鮮出兵後、慶長三年(一五九八)八月に秀吉の死亡があり、その後、徳川政権が落ち着くまでの慶長十五年(一六一〇)頃までは、有馬地区の教会は平和を楽しみ、有馬地区の信徒は増加した。(ルイス・フロイスの日本史及び日本巡察記では、年別・地域別に信徒数が記録されているが、記録に記載されている地域範囲が年ごとに不明確であること、把握した信徒数の信憑性に疑問があり、私見

では有馬領内のキリスト教徒は推定七千人程度ではなかつたかと考える)

慶長十六年(一六一)、晴信の嫡男直純が小西行長の娘マルタを離別し、徳川家康の曾孫の国姫と再婚した。国姫は家康の長男信康の娘熊姫を母とし、家康の養女として慶長十五年(一六一〇)掘忠俊に嫁すが、堀家改易により離別。記録では翌年直純に嫁している。

ルイス・フロイスの記録では、直純は父晴信とはキリスト教信仰を原因として不仲であつたらしい。直純も慶長元年(一五九六)に洗礼を受け(洗礼名ミゲル)ているが、家康の命により棄教した。先妻との離別、家康の曾孫との再婚は、江戸幕府の有馬地区のキリスト教弾圧の一手でもあつたのではないかと考える。

一説にはこの国姫は家康に溺愛された姫であるが、胸毛が生えていたと言われている。女性の胸に胸毛など想像もしたことはないが、インターネットで「国姫」で検索していただきたい。

慶長十七年(一六一)、有馬晴信に悲劇的の事件(岡本大八事件)が発生した。

ドレ・デ・デウス号を撃沈した晴信は、家康の褒を得て得意であった。彼はその勢いに乗って、先年龍造寺隆信に奪われた肥前旧領三郡が龍造寺隆信死後、佐賀の領主鍋島直茂所領になっているのを、家康に願い出て取り戻そうと思った。これを知った家康の近臣本多正純の与力岡本大八が慶長十七年(一六一)二月二十八日にその周旋をしようと晴信に甘言を以つて近づき、これを信じた晴信は彼に白銀六百枚を贈った。しかしその後連絡がないので、晴信は本多正純を詰問した結果、これを家康が知るところとなつた。江戸幕府は晴信と岡本大八を対決させた結果、晴信の贈賄が暴露し、その上、晴信による家康の寵臣長崎奉行谷川佐兵衛殺害計画も露見し、岡本大八は駿府で火刑、晴信は甲斐配流の上切腹。(一説にはキリスト教徒は宗教上自殺が禁止されているので切腹の場で介錯が行われた)

江戸時代のキリスト教徒は類属制度があつて、男女によって監視年限が異なるが、先祖がキリスト教徒の場合、五代も七代も監視下に置かれていた庶民とは全く異なる推移を辿っている有馬一族は、国姫効果と言うべきか、それとも直純以下歴代藩主の世渡りが抜群に上手だったのかは分からぬ。キリスト教弾圧の日本史のなかで、特異的な一族であったと考える。

長崎奉行殺害計画の露見といくつもの重罪の身にありながら、家名断絶どころか有馬四万石から一万三千石の加増転封となつた。これは理屈抜きの「国姫効果?」であり、有馬では直純がキリスト教弾圧もやりにくいだろか。この後の有馬家は、元禄五年(一六九二)直純から二代あとの有馬家十七代藩主清純のときに糸魚川藩に転封、さらに三年後に越前丸岡藩(五万石)に転封となり、正徳元年(一七一)二十一代藩主譽純のとき、幕府の格別の計らいで外様大名から譜代大名となり、以後は寺社奉行、若年寄、老中など幕府中枢の役職を歴任、明治には子爵に叙せられている。

江戸時代のキリスト教徒は類属制度があつて、男女によって監視年限が異なるが、先祖がキリスト教徒の場合、五代も七代も監視下に置かれていた庶民とは全く異なる推移を辿っている有馬一族は、国姫効果と言うべきか、それとも直純以下歴代藩主の世渡りが抜群に上手だったのかは分からぬ。キリスト教弾圧の日本史のなかで、特異的な一族であったと考える。

いやしく  
苟も独断と偏見なくんば  
何ぞ得ん年々後続の人を

### 鯨游海

群賢相集春 || 王羲之・蘭亭之會 「老少咸集  
ひ群賢盡く至る」より引用した。蘭亭之序  
の文章は千字文と共に書の教科書として有名。  
松本清張の書道教授なる中編佳作を想い出す。  
擔興 || 興を担ぐ。転じて「応援する。世話

意はない。こういう用法も和習と言つのか。  
橋下徹浪花京兆尹 (橋下徹大阪都長官)  
深謀遠慮似南洲 深謀遠慮は南洲に似たり  
清濁併存疑海舟 清濁併存は海舟かと疑う  
救國義人亡國輩 救国の義人か亡國の輩か  
永田町外獨悠悠 永田町外独り悠々たり

魅力的な会であり続けたいものである。それ  
には絶えざる新会員の加入が欠かせない。  
仄起の七絶。韻は上平声十一眞の春、  
新、人。正格の近体詩。

新春を迎える感懷を籠めて一首を詠んだ。

### 述懷

遊史群賢相集春 || 遊史の群賢相集う春に  
擔興命下壯心新 擔興の命下り壯心新にす  
苟無獨斷與偏見 苟も独断と偏見無くんば  
何得年年後續人 何ぞ得ん年々後続の人を

述懷 || 懐いを述べる。詠懷と共に漢詩によ

く登場する題。所で俳句や和歌には普通一首  
毎に詩題を付けるが原則。これが有る為に

首毎に詩題を付けるが原則。是に対し漢詩の場合  
難解な漢詩本体の理解の一助になる他、作詩

の背景の説明にも資するので合理的だ。そう  
いえば第二芸術論を唱えた桑原武夫は仏文学  
者であり乍ら漢詩をよくした人で新唐詩選な  
る名著もある。題の有無が論と関係するのか。

初唐の魏徵が詠んだ述懷 「中原還逐鹿  
投筆事戎軒……人生感意氣 功名誰復  
論」は不朽の名作として知られ唐詩選の巻頭  
を飾る。

をやく。世話役に就く。ただし漢語には転  
意はない。こういう用法も和習と言つのか。  
壯心 || 曹操・歩出夏門行 「……老驥伏櫪  
志在千里 烈士暮年 壮心不已」より。つ  
まりは人生暮年ではあるがやらんかな気概  
が横溢する様。懷えば私も既に暮年であった。  
苟 || いやしくも。仮にも。万一……としても。  
獨斷與偏見 || 独断と偏見は史遊会の信条。  
口語に訳してみよう。

史遊会諸兄姉ら多数の賢人たちが今年初頭  
の例会に參集して来られたとき、

「世話役に就け」との命令が下り、既に暮年  
に在った私は久しぶりでやらん哉の気概に満  
ち溢れることであった。

いやしくも「独断と偏見」という史遊会の  
信条ともいえる価値觀を会員が失つたならば、

どうして毎年々々新らしい後続の仲間が現わ  
れるであろうか。現われることはあるまい。  
何得は反語で強い否定「得られない」。

何れにしろ独断と偏見の価値觀を失なわず

京兆 || 首都。京は広い、兆は人が多い意。  
尹 || 長官。知事。首長。  
浪花京兆尹 || 大阪都長官。  
南洲 || 薩摩藩士、西郷隆盛公の号。  
海舟 || 幕臣、勝安芳公の号。

義人 || 正義漢。自己の利を省りみず他人の  
苦しみを救う人。ここでは大政治家の意。

口語に訳してみよう。

(橋下徹市長の)思慮深さはかの西郷南洲に  
そつくりだし、大きな度量と包容力は勝海舟  
の再現かと疑う程だ。果たして彼は救國の大  
政治家であろうか、或いは亡國の徒輩か?

今中央政界と距離をおき独り悠々としている。

おとぎばなし

「名君草」

三戸岡 道夫

旭光藩は、名前だけは旭光とまばゆく輝いているが、藩主の高倉頼長は暴君で、遊び好きで贅沢好き、政治に身が入らず、年貢は高い。領民は貧困にあえぎ、暗愚な政治を恨んでいた。

そんな評判が幕府の耳に入り、お家断絶にでもなつたら大変と、家老が江戸から儒学者を呼んで、徳政の訓話をさせ、君主が持つてはならないのは、権力欲、物欲、名譽欲の三欲であると説いても、まったく効き目がなかった。

「これは何じゃ？」  
頼長は好奇心にかられて庭に降り、しげしげと草の茂りを眺めていたが、草はたっぷりと肉厚の野菜のように見えたので、「これはなんだか、うまそうだな」

一枚の葉をちぎって口にいれると、  
「これはうまい。今夜の夕食はこれだ」

山海の珍味に食傷気味の頼長には、草の味がかえって新鮮な美味に感じられた。

こうしてその日から、毎食、この草が頼長の食膳に加わった。それは二、三日で飽くだらうと思っていたのに、草への愛着は日ましに深まるばかりで、あつという間に一ヶ月がすぎてしまった。

するとある日驚くべきことが発生した。

突然、頼長が、

「明日からの食事は一汁一菜でよい」

と命じたのである。山海の珍味から一汁一菜への急変に、家臣たちは、

「え、え、えっ！」

が消え去ったのである。

と驚いた。突然、暴君の食事が名君の代表すると、月の明るいある夜、頼長の住む二の丸御殿の庭の一角に、妙な草が芽を出したのである。そして二、三日すると、あつとう間に庭はその草で埋つてしまつた。

である上杉鷹山の食事のように変つたのである。原因是この草であった。一ヶ月この草をたべつづけたことによつて、頼長の中から、(物欲)

が消えたのである。それを聞いた領民たちも驚きの眼を城にむけたが、しかし頼長自身は自分の変化を別に何とも思つていなかつた。

草の一汁一菜は、さらにつづけられた。

(名譽欲)

ある日、突然、

「領内の米の出来具合を視察してくる」

と言つて、一人馬に乗り、追いかける家臣たちを振り切つて、城外へ走り去つた。

「今年の稲の出来具合は、あまりよくない。

さつそく年貢を下げろ」と言い出した。

「え、え、えっ……？」

しかし喜んだのは領民たちで、

(神さま、仏さま、殿さま……)

である。草を食べつづけた頼長の中から、

今度は、

(権力欲)

が消え去つたのである。

それでもさらに頼長は、草を食べつづけるのを止めなかつた。さらに一ヶ月たつと、またもや頼長は家老を呼びつけ、

「牢の中の百姓たちをすぐ放してやれ」と命令した。かつて年貢の減免を願つて城

へ押しかけた百姓たちが、城の石牢に閉じこめられてゐるのである。またもや家臣たちは、

「え、え、えっ……？」

頼長の中からはさらに、

が消え去ったのである。

草は、儒学者が説いても聞き入れなかつた、「権力欲」「物欲」「名譽欲」を、頼長の中から消したのである。

こうして頼長は草のおかげで、自然に名君になつた。

旭光藩ではこの草をいつの間にか「名君草」と呼ぶようになり、旭光藩は名前だけでなく、社会全体が明るくなつたのである。

### 黒船物語（四） —世界情勢と幕末— (オランダ編)

由利 潤一

初めて日本に現れたヨーロッパ人は一五二三年(天文十二)中国船で種子島に来て鉄砲を伝來したポルトガル人である。これに次いでフランス・ザビエルを中心とするキリスト教の伝来が始まる。キリスト教は有力者間にも広まりキリシタン大名も増えた。当国内で需要の多い中国産の生糸がポルトガル人により輸入され、変わりに日本から銀が輸

出される交易が、カトリック信仰の布教とともに盛んになった。長崎は、一時大村純忠によって寄進されて教会領になり、輸出入の中心になっていた。豊臣秀吉はこれを好まず長崎を没収して直轄領とした。

慶長五年(一六〇〇) 豊臣政権の五大老の筆頭として政治的権力を高めつつあつた徳川家康のもとに、豊後の白杵湾に異国の船が漂着したという知らせが入り、家康は大坂城で生存者を見出した。この船は一五九六年にオランダのロッテルダムを出てマゼラン海峡を通り東インドへ向かつた五隻のオランダ船団中の一隻リーフデ号であった。この時面接を受けた船員のうち、W・アダムズとヤン・ヨーステンは家康に伺候するようになつたのは良く知られている。カトリック教徒と違い、布教と交易とを分離したオランダとイギリスの両国にはこれを機会に朱印状が与えられ、九州の平戸にそれぞれ商館を開くことを許された。イギリスはマーケティングに長けたオランダとの商戦に敗れて撤退したが、オランダ商館は規模を拡大した。徳川家康は関が原の戦いの後、西軍に加担した者を整理し、譜代の大名たちを九州に配置した。ところが、

原の乱が起きる。かねて領土的野心を疑われたポルトガル人たちは、彼らを収容するために天領長崎に作られた出島に集められ、貿易は禁止され家族も含め全て国外に追放された。平戸のオランダ商館は一六四一年強制的に出島に移され、幕府はオランダと中国だけに長崎で貿易することを許した。以後一〇〇九年の鎖国時代を通じオランダは唯一西欧の国として貿易し、長崎で西洋文化を伝来する窓口となつた。

徳川家康は当初鎖国主義ではなく、朱印船による貿易にはむしろ熱心であった。リーフデ号の航海士ウイリアム・アダムスから海外の情勢を聞き彼を外交顧問とし、西欧式の2隻の帆船を建造させたりした。しかし秀忠、家光の代になり、島原の乱以降幕府が鎖国を国是としてからは、日本人の海外渡航は禁止、朱印船に用いられていたような航洋船舶は廃棄され、航海技術は忘れられた。また、戦国時代に水軍とともに発達した大型の軍船、安宅船は幕府によつて集められ、すべて廃棄された。慶長十四年(一六〇八)には輸送用のものであつても大型の船を作ることは禁止された。

事態が変化するのはペリーの来航であった。

たつた四隻の黒船に対しても日本は対抗する手段を何一つ持たないことが明白となつて、大型船建造の禁令は寛永六年（一八五三）に廃止された。当時老中であつた阿部正弘は、オランダに軍艦の購入を打診した。この依頼を受け、長崎奉行と交渉した出島の商館長クルチウスは長期的な視点から船舶、兵器を売るにあたつて先ず海軍の伝習を行うことを申し入れ、且つ伝習に用いるためにスームピング号という蒸気船一隻を幕府に供与することにした。一八五五年スームビング号は海軍伝習のための教官をバタビアから乗船させ、長崎に到着し幕府に献上され、観光丸となつた。幕府は伝習の総責任者として永井尚志を、伝習生として勝鱗太郎ら輕輩の幕臣三十六名を長崎に送り、長崎奉行別役宅を教場とした。また伝習生としては諸藩からの陪臣も伝習を受けさせた。航海術、運用術は教育班長ペルスレイケン、造船術、砲術は次席のスガラウエン二等士官が担当、そのほか船具学、測量学、算術、機関学などの学科があつた。このような組織的な学科や実技の教育は日本にとってはじめてのことであった。海軍伝修生はオランダ語を理解することは必須とされた。

伝修に用いられた教科書は、オランダ海軍の標準教科書であつた。中には数学の章もあり旗本たちもアラビア数字を覚えることから球面三角法まで学ばなければならなかつた。最初は随分戸惑つたことであろうけれど、みな熱心に学んだようで、実際の蒸気船の操作にも馴れ、過程を終える頃には船を江戸まで廻送できるようになつた。観光丸で江戸に戻つた第一次研修生の一部は、築地に新しく作られた海軍操練所の教官となる。

オランダの海軍伝習は二度に分けて行われ、二度目はWJC・カッテンダイケを長として教員団がオランダにて編成され、幕府が発注して完成したばかりのヤパン号（咸臨丸）で長崎に到着して第二次伝修生の教育に当たる。カッテンダイケの著書に『長崎海軍伝修所の日々』がある。彼が日本の未来を担う若者たちと過ごした日々が記されていて興味深い。

この第二次海軍伝修は、当時大老であつた井伊直弼によつて廃止され、一年余りの伝修で教師団は帰国して終わる。しかし同時に派遣された医師ポンペの医学伝修所と渥浦船舶修理所の建設は継続された。江戸に送られた観光丸その他と第一次研修生たちとで築地の海軍操練所で自前の海軍教育をはじめたことはうな幕府の速成教育ではオランダの意図したことすべてが伝わらなかつたかも知れないが、短い期間に幕府は自前の海軍を持つことが出来た。当時は諸外国においても海軍、軍艦などの改良、進歩が激しく行われていて、幕府が文久二年に三隻目としてオランダに発注した開陽丸などは日本側の希望で木造とされたが、鉄船でも建造可能であり、排水量二七〇〇t、長さ二七〇ft、幅三九ft、機関四〇〇馬力のスクリュー推進型、備砲はドイツ製の施条砲二六門の堂々たるフリゲート艦で、ペリーが来航したときのサスケハナ号、排水量二四五〇t、長さ二五七m、備砲九門、外輪式推進器に比べてもはるかに強力であった。ただ惜しむらくはこの主力艦が北海道で暴風雨のために沈没したように、事故、故障によつて失われた艦も多く、幕府海軍は榎本武揚のもとで戦つた函館海戦で全滅する。維新後は明治政府側が組織した兵学校でイギリス式の海軍教育が施されて日本海軍となる。幕府が海軍を持つことが出来たのは、オランダの協力によることが大きいので、この章を黒船物語オランダ編とする。

## 岩倉使節団の観た

## 歐米の文明度

新井 宏

明治五年から六年にかけて維新政府の中枢部を率いた岩倉具視の「遣米欧使節団」は、世界外交史上に類例を見ない「珍事」であった。正副使である岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚方をはじめとして、理事官として、田中光顯、山田顯義、佐佐木高行ら、書記官には福地源一郎もいて、日本に残つた政府要人は、三条実美、西郷隆盛、大隈重信、板垣退助くらいであり、政権基盤が固まつていないう時期にあっては、まさに奇跡であった。

ちなみに、明治維新の賞典様によれば、三条と岩倉が五千石というのを別格として、西郷隆盛が二千石、木戸孝允と大久保利通が千八百石、大村益次郎が千五百石、板垣退助、小松帶刀、吉井友実が千石であり、残留組には「実權はさておきの三条実美」と「政務に疎い西郷」を除けば、土肥出身者ばかりであり、使節団は「維新政權」そのものであった。この使節団の主目的は、不平等条約の改正

の予備交渉と西洋文明の調査で、明治四年末に出発し、米国・英國・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・ロシア・デンマーク・スウェーデン・イタリア・オーストリア・イスの合計十二ヶ国を訪問し、明治六年九月に帰国する。

使節団の正員は正副使、書記官、大使隨員、理事官、隨員の四十六名であるが、その他に一般隨員、留学生もいて、總員百七名。費用は六十万ドル以上。その公式報告書『米欧回覧実記』五巻を獨力でまとめたのが久米邦武である。

久米邦武は、佐賀藩出身で、儒学者の古賀謹堂に師事し昌平齋に学び、後に歴史学、古文書学で優れた業績を残したように、儒学を基礎においた第一級の教養人であった。したがって、彼の『実記』は、日本における研究対象としてだけでなく、近年では歐米でも、東洋の教養人が観た米欧として研究対象となつてている。

その中には、先進大国の華麗な物質文明に眩惑されなかつた新興の意気に燃える維新知識人の見識を紹介した論文もある。

久米邦武は、『実記』で歐米各国の「文明度」を次のように分類しているという。

面白いのは、当時の大国である英國、ドイツ、フランス、米国よりもデンマーク、スウェーデン、イスなどを上位に置き、イタリーやポルトガル、オーストリアを日本と同等あるいは以下と見なしていることである。

ちなみに、最近の国別ランキングによれば「幸福度」では、デンマーク、イス、オーストリア、スウェーデン、オランダ、米国、ベルギー、ドイツ、英國、スペイン、イタリー、フランス、日本、ポルトガル、ロシアの順であり、「ネットワーク度」では、デンマーク、スウェーデン、イス、オランダ、米国、英國、日本、ドイツ、オーストリア、フランス、ベルギー、ポルトガル、スペイン、イタリア、ロシアの順となつてている。

幸福度とネットワーク度を総合すると、久米邦武が与えた評価順とほとんど全て一致していく、例外はオーストリアくらいである。これを偶然というべきであろうか。

漢語の豊富な語彙とその表現力で、政治、

経済から思想、技術まで描写している『実記』

は、芳賀徹が「近代紀行文学の白眉」として

「鋭敏でのびやかな感性と犀利な觀察をもとに驚嘆すべき豊富な漢語を駆使して米欧文明の諸相を活写し……いつたん引用すると、どこまでも書き写したくなる」と絶賛している。

その久米邦武が政界に進まなかつたのは、

使節団帰国直後の政変にある。

留守政府は三条実美と西郷隆盛、板垣退助が取り仕切つていて、いずれも実務的な能力が乏しかつたので、そこに登場したのが司法卿の佐賀藩の江藤新平である。

彼は使節団の帰国前に、井上馨、山形有朋を汚職で追い落とし、實質的に土肥内閣をつくり、留守政府は重要問題は決定しないとの約束を無視し、「征韓論」を進めている。

歐米を見てきた大久保らがとても了解できる案ではない。これを止めるため大久保は死を決意し、盟友西郷と対決する。しかし、結局は留守政権の勝利に終わり、岩倉、大久保、木戸は辞任に追い込まれてしまう。

ところが、このことによつて中立的であった三条実美が心理的負担で病に倒れ、政権を放り出してしまつ。そうなると岩倉の出番であり、使節派の巻き返しが成功する。これが

明治六年政変である。

佐賀藩出身の久米邦武が政界に進まず、学

者の道を選んだのは、この政変が原因である。私は良かっただと思っている。

熊野三題 その一

### 「神武東征」

平山 善之

平成二十三年七月、歴博友の会のツアーリーに参加して初めて熊野三山を巡る旅をした。歴博で民俗学の研究をされている松尾恒一先生がご案内役で、お教えいただくことが多かった。

真夏の日中に火祭というものは珍しい。縁起では神武天皇の東征軍と熊野の女王ニシキトベとの激戦を伝えたといふ。

この神輿を見ていて、古代の武人が携えた楯を連想した。通常神輿といえば屋根の上に鳳凰を飾つた鳳輦型であるが、こちらは大きな板一枚なのである。そして、巨大な松明は暗い熊野の山中の道を、松明の明かりを頼りに吉野、大和をめざして北上する大勢の軍隊を彷彿とさせるものであつた。

熊野三山の神紋は「八咫の鳥」である。

記紀によれば神武天皇の大和入りにあたり、天照大神の命令で、その先導役を勤めたといい、三本足である。(今日、日本サッカー協

一本が四〇キロもあり、二人がかりで抱え、火の粉を撒いて乱舞する。

神輿は朱と金で飾られた扇神輿である。縦長の長方形の板に扇を散らしたもので一基を十数人で担ぐ。

会のマークになつてゐるのはなぜだろう？  
サッカーといえば足、それが三本あるからで  
あらうか。）牛王宝印の神符にはこの鳥で文  
字を描いてある。

あれこれ考え合わせると、記紀の伝える神  
武東征の話は、事実であつたと思える。

勿論記紀の話が全て事実とは言えない。創  
作もあれば、誇張もあり、著者や権力者が捻  
じ曲げた部分や故意に書かれなかつた事もあ  
ろう。一方で長年炉辺で親から子へと語り伝  
えられてきた民族の歴史が、初めて文字に記  
されたことも疑えない。

神倭伊波礼毘古命が、兄、五瀬命と高千穂  
を出て、豊の国・備の国を経て浪速に至り、  
生駒方面から大和を攻めたが長脛彦に敗れる。  
太陽に向けて攻めたのが間違いと熊野へまわ  
り、八咫鳥の導きで熊野から吉野に入る。そ  
して宇陀から大和に入り、初代天皇になる、  
というのが古事記である。（熊野の女王とい  
うのは日本書紀に「至熊野荒坂津 因誅丹敷  
戸畔者」とあるのがそれか）

推測するに九州から近畿へやつてきた部族  
があり、恐らく何世代かかけて瀬戸内海を東  
上、途中岡山辺にも寄留しながら大阪湾に着  
いたであらう。大和の原住民に負けて、紀州

半島を廻り、那智あたりから上陸し、山中を  
苦労しながら北上して、吉野を越え宇陀地方  
から大和盆地に侵入したであらう。ついには  
原住民を従え、新王権を築いたであらう。

記紀の話は大勢の人の何世代もの話をひと  
りの話にしたものであらう。

那智大社の東隣に新宮がある。新宮から熊  
野川を遡ると、本宮に至る。これらは、その  
軍勢が一時的にもせよ本拠或いは宮殿をおい  
た場所ではなかろうか。そして本宮から吉野  
へ至る道は峻険な難路である。

吉野には吉野山金峯山寺や金峯神社がある。  
ここも修驗道の中心で、熊野が天台系で本山  
派というのに対し、吉野は真言系で当山派と  
いう。

両派の修驗者が競つて修業に励んだのが本  
宮と金峯山を結ぶ「大峯奥駆」（と呼ぶ道）  
である。熊野から吉野へ行くのを「順峯修行」、  
吉野から熊野へ行くのを「逆峯修行」と言う  
そうである。順逆は、修驗道の開祖であり、

「大峯奥駆」を開いた役行者（六三四～七〇

）が熊野から吉野へ最初に行つたからそち  
らを順としたという。順のほうが険しいとい  
うから、東征軍は大変だったであらう。巻蒼

とした山中を長蛇の列をなし、松明をかざし、

重い木の橋を携えて、あえぎつつ進む軍勢の  
姿が目に浮かぶ。

吉野からは、大和は近い。記紀の神話が数  
多く残るのは宇陀市、桜井市であるから、こ  
の軍勢は今の明日香村経由ではなく、宇陀市  
側から、桜井市を経て大和盆地へと下りてき  
たと思われる。書紀でいう「神日本磐余彦天  
皇」の磐余というのは桜井市駅の南をさす地  
名という。一帯に古墳の多い地域であるが、  
ここにある茶臼山古墳は最古に近いものとい  
われ、出土品の中に王者が持つ玉杖があつた  
ことで有名になった。

事務局により

※鈴氏のご紹介で七月の招待講師が

決まりました。

和田肇允氏

テーマ 地震と建築

氏の紹介

一級建築士・構造計算適合性判定員

建築設計事務所勤務を経て、現在  
㈱建築構造センター神奈川事務所長